様式 9-1

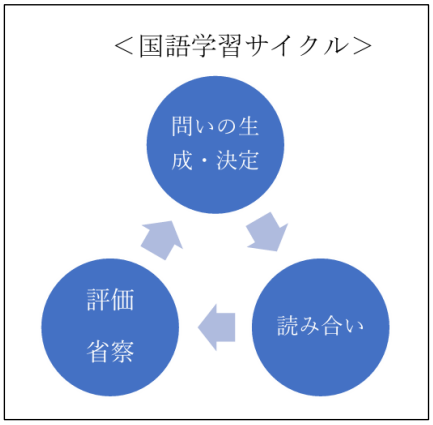
# 主体化する国語科授業の開発 －言葉を学ぶ習慣的思考の育成を核にして－

香月正登（梅光学院大学 子ども学部 教授）

本研究の目的は、学習者を中心とした主体化する国語科授業を開発することにある。その中核に位置付けているのは、言葉の学び方としての「言葉を学ぶ習慣的思考」である。習慣という語が表すように、国語科授業に留まらない、日常の言語生活を視野に入れた主体化である。

ここでいう主体化とは、学習者が自由に、好きなようにと教育システムを飛び越えてということではなく、システムに縛られながらも、私という主体を埋没させず、活かすことができるように国語学習に向かっていく姿である。国語学習に没入し、言葉の学びを創造する主体となることを描いている。そこで設定したのが、以下の主体化の 4 要件である。

要件①　学習者が言葉の何をどう学ぶかを決める
要件②　学習者と教師でともに言葉を探究する
要件③　学習者相互で言葉の本質について対話する
要件④　学習者が言葉の学びを評価する




この要件の中で中核となるのは要件④である。要件④による学び方の自覚が主体化の原動力となり、要件①と④が連動し、学びの中心軸を形成する。要件③では、学習者相互で言葉の学びの本質に向かう。要件②は、それを支える学習者と教師の関係性を示している。

この主体化の 4 要件を実践モデルとして考案したのが右の「国語学習サイクル」である。学びを駆動する力をもつ問いを位置付け、サイクル的な展開とすることによって、省察機能がより強く働き、言葉の学びを主体化することができるという仮説に基づいている。また、国語学習サイクルの中核は、言葉を学ぶ習慣的思考である。学び方を駆使する過程で指導事項を活用し、学び方を学ぶことによって、主体の動きを促進する。

国語学習サイクルを実践モデルとした実践研究は、2022 年からの先行実践を経て、2023 年度より 5 名の実践者（白坂・小泉・古沢・木原・森）との共同研究体制で行っている。クラス状況は異なるが、国語学習サイクルの効果検証では以下の点を明らかにしている。

①学習者に問いの決定を委ねたとしても、指導事項を学ぶことができ、教師の想定を超える学習内容が現れる場合があること
②学習者は、個々で生成した問いと、全体で決定した問いとを関係付けながら学んでいること
③国語学習サイクルによる国語学習においても、国語学力の保障は充分可能であること
④学習者の国語学習への自律的参加や学び方への意識が高まること

①～③は、国語学習の成立に関わる検証である。学習者による問いの生成・決定で国語学習が成立しうるのかという懸念点に関しては問題はない。特筆すべきは④で、前単元での学習経験を語る場面が格段に増え、問いの関連性を見出したり、学習をプランニングしたり、国語学習への主体行為が随所に現れる。国語学習サイクルにおける学びの体験、学びのアレンジ、学びのデザインといった変化を捉えることができる。

また、国語学習サイクルによる国語学習によって教師の変容も顕著である。共同研究者は、国語学習サイクルの実践化に当たり、さまざまな困難に出会い、教師の立ち位置、関わり方に再考が求められる。その結果、これまでに抱いていた授業観、子ども観、教材観、評価観などの「観」を更新し、見える事実、見たい事実ではなく、見えていない事実を見ようとし、教師としてのあり様を常に問いかけながら実践に向かう。そこに予定調和的な学びは存在せず、子どもの事実への驚きと感動によって教師のリフレクションが促され、批判的省察が多く見られるようになる。

以上、主体化する国語科授業の開発に当たって、国語学習サイクルによる国語学習は実践可能であること、学習者は当事者性を高め、学び方を学び主体化すること、教師教育としての意義が認められることを明らかにできたのは本研究の成果である。現在は、説明文と物語文の問いの生成・決定における差異や融合の様相、省察の在り方の検討を進めている。さらに、実践の細部にわたる学習者の学びを捉え、国語学習サイクルを基軸とした授業バリエーションを広げていくとともに、学び方を中心としたカリキュラムの開発に臨みたい。